

科学振興論について

石原 純

—

現時科学振興の声が頻りに挙げられているのは、極めて当然のことではあるが、ともかく喜ばしいことには違いない。もちろん識者たちの間には、この事は既に夙くから痛感せられていたのではあるが、それらに於て説かれて来た言論が、不幸にして政治家やその他の社会人の耳にまでは容易に入り込み得なかつたのであつて、それにはやはり時勢の到達を待たねばならなかつたのもあろう。今日に於ては、内外の情勢が漸次に逼迫して来て、之を切り抜けるためには結局は科学の力に依らなくてはならないことが、誰しにも明瞭になつて来たのであり、ここに科学振興の叫びが特に昂まつたのであるに違いない。それにしても、かくて科学の重要性が一般に認められることとなつたのは、ともかくも幸いである。

併しながら科学の振興は、単にその必要を認めるだけでは、なおその実現を期することができないのであり、之がためには、適当な具体的な方策が速かに進められなければならないのは言うまでもない。私は併しこの問題については、ここでは論及するにも及ぶまいと考えている。それよりも寧ろ更に一般的な事柄を取り扱つておきたいからである。

ところで、このような一般的な事柄のなかで、特に注意を喚起したいのは、同じく科学の振興を論ずる人々のなか
に、全く科学に対する理解を缺かいているものがあるという驚くべき事実についてである。之これに関して、その最
も甚はなはだしい具体的な一例をここに挙げておくのも無益ではないであろう。私は実は、最近にそれに眼を触れて、殆
ど啞然あぜんとしたのであった。なぜなら、その筆者は文部省に所属する国民精神文化研究所の所員であり、それが載せ
られているのは、内閣のもとにある紀元二千六百年奉祝会の機関誌たる『紀元二千六百年』であるからである。

その題目は「江戸時代の科学について」と云うのであるが、そこで戸時代に於ける種々の事蹟を挙げているのは
よいとして、その特質を超理論的、直観的（非合理的）、具体的（非抽象的）、総合的（非分析的）であるとなし、こ
れこそ「日本独特の科学の在り方」であつて、この点で「ヨーロッパ的科学」と區別せらるべきであり、「これが
若しその儘健全な発展を遂げたならば、明治時代ヨーロッパの科学文明に依頼するまでもなく、むしろこれを遙か
に凌駕りようがしたであろうと思われるものさえある」とまで述べられている。更に結論に於ては、「江戸時代に発展した
日本科学の伝統は近代に於て決して健全には伸ばされないので、むしろ近代科学が日本科学の伝統を切断している」
と云い、両者は「実質的には全く異つている」もので、しかも「近代の日本科学は東洋を失い、自らヨーロッパに
依拠した」となし、「そうした学問組織や体系の中に踳躄きよくせきする限り、それは何時まで経つてもヨーロッパ的科学に
止まるに過ぎない」ので、「こうした形態が何かの形によって止揚されない限り真の明日の日本科学は生れ得まい」
と断るのであった。そして「ここに江戸時代の科学が新たな意義を以て再認識さるべき理由がある。今日東洋
は日本によってあらゆる領域に於てその本然の地位を奪い回さなければならぬからである」と云うのが、その最
後に於ける結語である。

この文章を読んで、私はその筆者が科学なるものを、いかに解しているのかを想像するのに苦しむのである。勿論もちろん
そのなかで、時には「科学以上の科学の領域」などという極めて曖昧な用語も見られるのであるが、ともかくもヨ

ロツパの科学に対立する日本の乃至は東洋的^{ないし}科学の存在を肯定しているのは確かである。併^{しか}しながら、少しでも科学の本質を正當に理解する限り、科学に幾種類もの方法が可能であつたり、又はそれらが民族的に異なり得ると考へるのは、それこそ最も非科学的な思考に外ならないことを悟らなくてはなるまい。なぜなら、科学なるものは自然の事実を論理的に整序する学問としてのみ解すべきであつて、しかも自然の事実や人間の論理に幾通りもの異なるものの存することを肯定するのは、到底不可能であるからである。かような科学の本質を理解しない人々が世間に往々あるのは、それは科学普及の十分にゆきとどかない現在に於て、止むを得ない処ではあるが、多少とも指導的地位にあると世間から見られているものが、これほどな無理解な言辭を弄することに對しては、その弊害の多大であるのを私は恐れるのである。科学振興を表看板に掲げようとす文部省自身が、そのお膝もとに於けるかような言論を、そのまま見遁^みがしていることなどは、一層不可解でもある。

誤解を避けるために附言するならば、或る人々は現在の科学が、単に抽象や分析のみを事とするかの如^{ごと}くに見做^{みな}しているが、それは大きな誤謬^ごで、之等^{これら}の抽象や分析は、やがて総合的な理論体系に到達するための段階として必要なものであることを、見遁^みがしているのである。総合的な理論体系は、抽象分析なしには決して獲得することはできない。我が国の古代に於て、すぐれた刀劍やその他の卓越した工芸品がつくられた場合などを考え合わせてみても、当時の謂^いわゆる名匠たちは、その取り扱う対象の極めて微細な変化に注目して、之等^{これら}を適宜^{てきぎ}に処理したのである。ただそこでは事柄がその技術的な処置に終つていて、之等^{これら}を理論的に整序することが缺^かけていたから、従^{したが}つてこの場合に科学が生れ得なかつたのである。だから、この外觀を漠然と見て、抽象分析がなかつたと断ずるのは抑^{そも}も誤まりである。

また、もう一つには之等の名匠が直観能力にすぐれていたことは確かであり、それは我々の大いに誇りとすべき処ではあるが、抽象分析を行う今日の科学に於て、恰も之とは全くその方法を異にするかの如くに論ずるのは、それもまた根本的に誤っている。今日の科学理論の体系は、全く論理的に整序されてはいるが、その要素を形づくる諸法則の発見や、更にかような理論の可能性を予見することは、すべてすぐれた直観能力に俟たなくてはならないのであって、之を缺いては恐らく科学を一步でも進めることはできないに違いない。嘗てポアンカレは、之を一種の靈感であると言った。科学に直観能力が必要でないなどというのは。それこそ科学の何ものかを知らない迂儒の言である。

江戸時代に於ける名匠の出現が、我が国の誇りであることは、上述の通りであるが、今日の時代には徒らに名匠の現われるのを拱手して待つわけにはゆかないので、そこにせひとも科学を必要とするに至るのである。科学的にその方法を究めさえすれば、誰にも容易に同様な仕事を成就することができるからである。この意味で、現代の科学は我々にとって絶対に必要なものであり、之を無視することは、断じて許されないのである。

四

上述の一例は甚だ極端なものに属するが、それとはやや意味を異にして、近頃ではやはり日本科学を高唱する人々がある。之等も謂わば時流に阿ねる言に過ぎないと我々は考えるのであるが、例えば現に我が国に於てどのような科学研究が特に必要であるかを考え、その研究に精進すべきことに、我が国の科学学徒の本務があるとするのは、極めて当然であるにしても、之を指して日本科学であるとするのは、少くともその表現の方法を誤っていると云わなくてはなるまい。既に科学に幾通りもの異なる内容が存在し得ないことを認めた上では、之は単に当面の日本に於ける科学若くは科学的課題ではあり得ても、それ以外の何ものでもない筈である。若し「日本に於ける」科学と

称する代りに、之を「日本の」科学と称したとするならば、それは言語の正しい使用を誤っていると云わなくてはならないのであり、少くとも言語使用に於て非合理的、従つて非科学的であるべきである。科学的精神を高調する人々は、宜しくかような点に於てもまた慎重であり、科学的であるべきことを、私は敢て強調しておきたいのである。

要するに、苟くも科学振興を真に深く考慮する人々に於ては、かような枝葉末梢的な問題に捉われることなく、正当な意味での科学を理解して、之を押し進める根本的な研究に専心すべきである。そこにまさに科学の真に偉大なる所以をおのずから悟り得るであらう。

(昭和十五年十月)

- 底本には、『科学のために』（科学主義工業社、一九四一（昭和十六）年一月二十五日）を使用した。
- 読みやすさのために適宜振り仮名を追加した。
- 旧漢字は新漢字に、旧かな使いは新かな使いに変更した。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセットを行い、 $\text{d}^{\text{v}}\text{i}^{\text{p}}\text{d}^{\text{f}}\text{m}^{\text{x}}$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。